

「もういいと言っている！」

「……わかりました」

しよぼん、と神父が肩を落としたがら残念です、とぼそりと呟く。が、すぐに笑顔になった。

「帰国する前に、是非貴方の答えを聞かせてください、アーサー」

フレッドの一言に、物凄く嫌そうな目付きで真剣な眼差しの神父を睨み付けた。

なるほど、神父を知っている人たちが、長く話をしたくなさそうだったのがよく判った気がする。つまり、物凄く面倒くさい人なわけだ。

雪男はなんで自分がこんな所にいるのか、と一つ溜め息を吐いた。

「あなたは、奥村雪男君、ですね？」

神父がわざわざ通路側に席を変えて声を掛けてきた。

「フレドリック・オーソン神父です。バチカンの典礼秘蹟省に勤めています。正十字騎士團では上一級祓魔師で、監察部に所属しています。貴方のお父さん、藤本神父には大変にお世話になりました」

「ようこそ、オーソン神父」

差し出された手を雪男は大した熱意もなく軽く握った。相手はそれを上回る力強さで握り返してきて、それこそぶんぶんと言を立てそうなほど激しく上下に振った。

「フレッドと呼んでください」

雪男と握手したまま、にこやかな顔でまじまじと見つめてくる。色の薄い青い目が、きらりと光った。それが不穏な空気を孕んでいるような気がした。

「あの…、手を離して下さい」

「失礼。貴方にはお兄さんのような力はないのですか？」

唐突だった。悪意も何もない、平坦な調子で尋ねられた質問で反応できなかった。掴まれたままの手が振りほどけなかった。

「なにを…」

「ああ、ごめんなさい。奥村燐君に会うなら、ぜひ貴方にも会わなくては、と思っていました。お会いできて光栄です」

来日には別の目的があつたらしい。先ほどの不穏な印象は、これか。

「ぜひ、ゆっくり時間を取って、色々お話をさせてください」

神父の口元に浮かぶのは優しい笑みなのに、雪男の背中に悪寒が走る。頭の中では警報が大音量で鳴り響いているような気がした。

明けて翌日の昼休み。

奥村兄弟、そして勝呂竜士、志摩廉造、三輪子猫丸と、いつの間にか顔を合わせるようになった男子生徒たちで適当に中庭で座って昼ごはんを食べていた。そこで、昨日の夜の任務はなんだったのか、と燐に聞かれた。そういえば、緊急の呼び出しで晩飯もそこそこに出て行ったのだった。

「バチカンからのお客様をお迎えに行ってきました」

「バチカン…？」

皆の視線が集まる。興味津々なのだろう。あるいは、また聖騎士エンジェルのような燐を目の仇にする存在かと疑ったのかも知れない。場合によってはそうかも知れない。

「パチリークスの件で、あちこちの支部を視察されてるようです。祓魔塾にもいらつしやるかも知れません。失礼なことしないでよ？ 兄さん」

「俺かよ！」

燐が信用ねーな！ と文句を言う。燐が過去、そう言う機会にきちんとできた記憶がないから、注意したまでだ。兄さんの傍若無人な態度を喜ぶ人ばかりとは限らないし、出来ればパチカン関係者にへんな印象を与えたくない。そう言う心遣いなんだけど、わかってない、よね。勿論。

「んで、ばちりーくす、つてなんだ？」

「パチカンで起こった、機密漏えい事件のこと」

「きみつろーえい…ねえ」

見られたくねーもんはテメーで始末しろつてことだな、とにべもなく燐が斬る。事件の詳細を知っている訳ではないだろうに、それでも全幅の信頼を置いていた執事に裏切られた法王が聞いたなら、酷く皮肉に聞こえることだろう。雪男は誰にも判らないように小さく笑った。「正十字騎士團に関しても情報が洩れてないか調べたはる、言うことですか？」

「確証はありませんが、恐らくは…」

勝呂の問いかけに、雪男は言葉尻を濁す。昨日の神父の態度に不安を覚えたからだ。正十字騎士團が関係機関であるパチカンに燐の存在を秘匿していた可能性もある。それが、今回の機密漏えいで、存在が明らかになったのだとしたら。兄さんについても調べに来たのではないか。

祓魔師に悪魔の血を引く者がいるのは、悪魔祓いに役立つと言う一

点で、黙認されていたのかも知れない。だがそれも、正十字騎士團、ひいてはパチカン法王庁へ弓引くことがないという前提があつてのことだ。だが、魔神の子供となれば、話は違ってくるだろう。

僕は…、いや、明らかに悪魔の力を現わしている兄さんは、どうなってしまうのだろうか？

「どーせ、メフィストのヤツじゃねーの？ おーりよーとか、ワイロとかさ」

雪男の不安も知らぬげに、燐が腹立たしそうに唐揚げを口に放りこんで、乱暴に咀嚼した。てか、横領ぐらい漢字で言えよ。

「お前…、塾長を呼び捨てにすんなや…」

勝呂が呆れたように笑う。

「だってよ、アイツお菓子は山のように食ってるし、パンサンとか言つてカップラーメン出してくんだけぜ？」

意外と旨かったけどな、と偉そうに言う。ちゃっかりラーメンライスにして最後まで平らげてきたクセに。おまけに、カップ麺一つじゃ足りねーと、しばらく文句を言っていたつげ。

「塾長は、一応正十字学園町の名士ですよ」

「一応かよ」

子猫丸の言葉を、燐が即座に混ぜ返す。

「まあ、パチカンや騎士團から金を巻き上げたりはせんですよ。むしろフェレス卿は正十字騎士團に相当な額を寄付したはりますからな。騎士團のほうかむしろエエように使われとるのと違いますか」

廉造が何でもないようなことのように洩らした言葉に、思わず目を剥く。雪男は疾うに把握していたことだし、自分にアクセス出来る情報範囲でも調べられることだから、内容としてはそんなに驚くほど

のことではない。だが、それをまさか廉造から聞くとは思わなかった。それだけに、もう少し祓魔師の勉強やら任務やらに身を入れてくれないかなあ、と思う。

「志摩さん、随分詳しいですね。なんや悪いモンでも食べはったんですか」

「熱でもあるのと違うか」

まっとうなことを喋るのは、何かよくないことの前触れなのでは、と疑う勝呂たちに、酷い！と廉造が抗議した。

「お父と柔兄（じゅうけい）が随分前に調べよったんですよ」

受け売りですわ、と笑う少年に燐がすげえ、と一転尊敬したような顔をしていた。

「そう言うわけだから、兄さんくれぐれも変なことしないでね」

「しねーよ！」

燐は早く行けよ、と言いながらおざなりに雪男のネクタイに触れて、乱れても居ないそれを直すフリをする。

「晩飯、作っとくから」

「うん、楽しみにしてる」

緊急だと言う任務に呼び出された雪男は、にっこりと笑って日本支部に通じる鍵を捻った。

ばたん、と素っ気無い音を立てて扉が閉まる。しん、と祓魔塾の廊下に静寂が満ちた。

「さて、と。次グリモアだっけ」

燐がカバンをごそごそと探って、テキストをあれでもない、これでもない引つ張り出しながら教室に向かつて廊下を歩く。

「八候王（やっくわう）の一人が、別のヤツじゃ天使だったりとか、名前が違うとか、勘弁してくれよな」

ぐしゃぐしゃに詰められたプリントをぶちまけながら、やっこのことで取り出したテキストを開く。今日の範囲をぶつぶつと読みながら、開いた方の手で床に落ちた紙を手探りに拾うと、いい加減にカバンに突っ込む。

「プリント、落ちてますよ」

肩を掴まれて、はっと我に返る。

「あ、ワライ。ありがと……な……」

プリントを受け取って、肩に掛かった手をなぞり、顔を見上げて燐は思わず身体が緊張するのを止められなかった。金髪の男。メフィストの懲戒尋問の場で、俺の足を切ったあの白尽くめの……。

「どういたしました」

相手がにこりと笑う。その柔らかく深い声と笑顔で、は、と我に返った。違う人だ。養父、藤本獅郎が着ていたような、黒い神父の服に今更気付く。

「君が奥村燐君？」

「え？ お、おお。そうだけど……」

「初めまして。私はフレドリック・オーソン神父です」

ども、と躊躇いがちに差し出された手を握る。

「スゲー日本語ペラペラだな。で、神父さんがこんなとこで何してんだ？」

「貴方に会いに来たんですよ」